2014年
12月25日[木]
135号

地域共創・未来共創の大学へ

広報 沖縄大學

発行
沖縄大学 経営企画室
〒902-8521 沖縄県那覇市字国場555
☎ 098(832)2910
http://www.okinawa-u.ac.jp

Contents

02 第55回沖大祭 ―キモチをカタチに―
03 Feeling Café ～Noスーツで社会人と交流
04 比嘉 正人君「おきなわ文学賞」等小説部門受賞
05 情報保障の取組が「新人賞」
06 学生プラスの活動が「総務大臣賞」（前編）
08 卒業生インタビュー　毛利孝雄さん
10 最終講義　加藤 彰彦 先生（後編）
13 わがゼミナール／研究のひろば
14 記事「児童福祉特別奨学金制度」／父母懇談会等
15 沖縄ちゃーがんじゅう大学院／リレーエッセイ２
16 教職採用試験合格体験記等

学長コラム ①

学長室の宝物

仲地　博

学長室に３冊の不ぞろいのスクラップブックがある。１冊は大学ノート、１冊はクリアーファイル、もう１冊はバインダー。内容も雑多だ。社会評論、スポーツ、産業、街ネタ、学芸等なんでもありだ。知らない人が見たら、スクラップの主の関心に戸惑うに違いない。しかし、関係者が見たら一目瞭然、すべて沖縄大学に関連する記事なのだ。ゲッチョセンセや渡辺先生の連載はまとまっている。

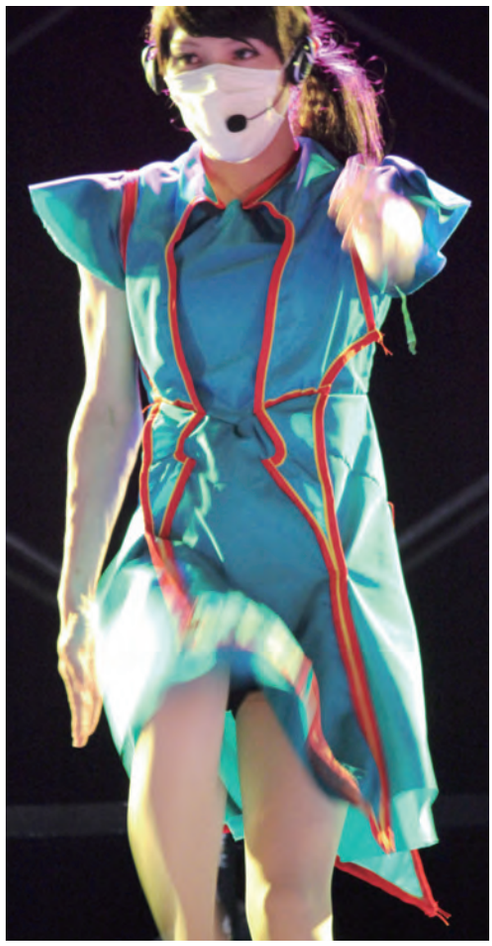
このスクラップは秘書室が集めたものではない。広報担当がやったものでもない。もちろん（と言っていいかどうか）、無精な私にはこんなことはできない。

このスクラップをしてくれたのは、３号館前に詰めていた守衛の仲宗根さん（今は別の現場で元気に働いているそうだ）。相方の平山さんが協力し、１人は新報１人はタイムスで両紙からのスクラップだ。

学長就任直前の３月のある日（私は不在だった）、お２人が、ロールケーキを添えて「学長の手元にあれば役に立つかもしれない」との口上で秘書室に持参されたという。後でお礼を述べると、平山さんは、「沖大が好きでなければできません」と言われた。涙もろい私は嬉しくてほろりとした。

学長激励会や土曜教養講座で、「私は沖大ファンです」と自称する人に２人ほどあったことがある。国立の某大学ファンと名乗る人がいるとは想像しにくい。沖縄大学は、地域に愛されている、その証左がこのスクラップブックだ。学長室の宝物だ。

フリスビーを
ゲーム
やこみませんか?



第55回
沖大祭
11.2(SUN)~3(MON)
11:00~21:00

愛す栗山さん
2-303

第55回 沖大祭
―キモチをカタチに―

沖大祭実行委員長
国際コミュニケーション学科３年
國吉　海人

去る11月2～3日、第55回沖大祭が開催された。今年のテーマは「キモチをカタチに」。学生一人ひとりの表現や個性を思う存分この沖大祭で発揮してほしいという思いがこもっている。仲間や地域の方々と共に、心から楽しめる大学祭作りを目指した。

今年の沖大祭では、前夜祭に昨年度も行われたＮＨＫラジオ番組「沖縄ミュージックジャーニー」の公開収録が行われ、きいやま商店、Ｉ―ＶＡＮが前夜祭を大いに盛り上げてくれた。さらに本祭ではＲ３、５ｔｈＥｌｅｍｅｎｔｓ、大城美友、アイモコ、パッション屋良、サザンバンド沖縄、ｊｉｍａｍａがステージの華を添えた。そして大トリを沖大エイサー部「新風」が務め、最後には来場者の方々と沖大生が一体となってカチャーシーを踊った。今年の沖大祭も皆が一つになり、感動的なフィナーレを迎えることができた。

出店、展示の部では法経学部の崔ゼミが手掛けた「おばけ屋敷狂気病棟」、マリンスポーツサークルの「フリスビー遊び」などが子ども達に大盛況だった。

私には将来イベントプロデューサーという仕事に就きたいという夢がある。小さい頃から獅子舞やエイサーをしていて、人を楽しませるのが大好きだった。将来、沖縄の素晴らしい伝統芸能を多くの人に伝えたい。学生支援課の方に沖大祭の実行委員をやってみないかと誘われた時、すぐ「もちろん！」と返答した。

実行委員長として動き出したときは、それまで想像していなかった苦しい瞬間もあったが仲間が一緒に頑張ってくれた事で、徹夜の作業も乗り切ることができた。

沖大祭最終日のステージで実行委員長の挨拶を終え、来場者の笑顔と温かい拍手に包まれたとき、「本当に実行委員長をやって良かった」と思った。最後まで私を支えてくれた、職員の方・友人・家族・そして実行委員にはとても感謝している。また、今回このような最高の沖大祭が開催できたのは、来場された多くの人の支えのおかげだ。本当にありがとうございました。

来年は今年の実行委員の経験を生かし、沖大生全員を巻き込んだ全員参加の学祭を、そしてより学生自身が楽しめる学祭を目指していきたい。

今回、前夜祭を一般開放し、ＮＨＫさんとの協同企画で初日からたくさんの方に来場いただきました。また、ハロウィーンとの連動企画「仮装コンテスト」では、特に今年を代表するディズニー映画「アナと雪の女王」のキャラクターに扮した学生に子ども達が群がり、とても微笑ましいものでした。沖大祭の特色である、リユース皿を利用しての模擬店の出店により、大量のゴミの削減にも成功しました。来場者、また各方面からの関係者に心より感謝申し上げます。（学生支援課　金城 慎介）

Feeling Café
～NOスーツで社会人と交流～

国際コミュニケーション学科４年
中村　枝織

Feeling Caféは、学生が社会人と気兼ねなく会話を楽しむ体験を通して、就活のイメージを少しでもポジティブに変え、自発的に就活に取り組めるようになるきっかけを作ろうと開催しました。

今までにない「楽しめる」内容にしようと思い、学生六名の実行委員は、就活をしている私たちが直面している〝緊張や不慣れなあまり積極的に質問出来ず、企業の方とコミュニケーションがうまく取れない〟という悩みを解消出来るイベントにしようとゴールを定めました。

夏休みからプロジェクトが始動し、スケジュール管理や広告制作、シナリオ・パワポ作り、会場のレイアウトなど、メンバーそれぞれが役割をこなしながら、毎週必ずミーティングを行い、企画の方向性を確かめました。また、本番さながらのリハーサルも二回行い、どのような言葉を使いどのように進めていけば参加者に企画の主旨や目的がうまく伝わるかを意識しながら、修正を加えていきました。

本番当日、私は司会進行を務めさせて頂きました。自然な会話が生まれる場になるよう堅くならず元気良く、そして滞りの無い進行を心掛けました。緊張していてあまり記憶がありませんが、たくさんの方々からお褒めの言葉を頂き、挑戦して良かったと思っています。

「参加学生三十名」を目標としていましたが、予想を上回る五十四名。イベント参加満足度も五点満点中四・七ポイントと非常に高い結果で、当日は大盛況となりました。アンケートにも「堅苦しい雰囲気がなく、質問がしやすくて良かった」「合説で聞きにくい事も聞けて、今までとは違う体験が出来た」などのコメントが寄せられ、私達が設定したゴールに沿った意見を多くいただきました。

学生スタッフメンバーは、今までこのような学内イベントに関わったことのない初心者でしたが、参加してくれる学生の今後のためにという強い想いが良い成果に繋がったと思います。

このFeeling Caféを通して、私は自分の可能性を広げ、「やればできる！」という実感を得ることができました。積極的に発言し行動できる自分に出会い、成長を感じられる毎日を過ごせたのは本当にラッキーでした。次はこの経験を自身の就活に活かしたいと思います。

最後に、協力して下さった株式会社琉球新報開発さん、有限会社オーシャン・トゥエンティワンさん、参加して頂いた企業の皆様、学生の皆さん、本当にありがとうございました。

10月15日、本学のホワイエで、リラックスした雰囲気で社会人と就職について会話を楽しむ「FeelingCafé」が開催されました。

参加したのは広告代理店や航空関連会社、観光業、ＩＴ企業など12社17人の社会人と、54人の学生。

今回の企画は、「従来の合同企業説明会では、気軽に質問できない」といった学生の声から生まれたもので、学生と企業と就職支援課のコラボで実現しました。（就職支援課　森山 彩）

比嘉 正人 君（福祉文化学科３年）

11月27日
『20年の眠りと涙を一粒』
「第10回おきなわ文学賞」小説部門一席　沖縄県知事賞受賞

12月10日
『クオリティオブライフ』
「第８回琉球大学びぶりお文学賞」小説部門受賞

―沖大では文芸部に所属されているようですが、顧問の我部聖先生は厳しいですか？

そうですね、けっこう小説に対する意見が食い違ったりしてますね（笑）。我部先生は批評家でもあり、ズバズバ言ってくるので、時々ココロ折れたりしながら（笑）。

―『沖大文学』第三号の発刊準備も？

僕はバイトが忙しいので、あんまり携われないんです。

―文学の世界に入ったのは、いつ頃ですか。

書こうと思ったのは中2です。その時に流行ってたのが『恋空』という小説で、それを読んだら、「自分でも書けるだろう」って。実際書いてみたらけっこう難しくて、その頃はいわゆる「中二病小説」っていうんでしょうか、痛々しいのを量産していました。それは僕の中で黒歴史みたいになってて、あまり掘り返したくない思い出なんです。

それで、はじめて賞に応募したのが高2の頃で、名桜大の審査員特別賞というのをいただきました。それから本格的に書き出して、書いて認められることの楽しさというのを知って、夢中になりました。

―読む方も、大量に？

それが、けっこう読まないんです。「読んだ方がもっといいの書けるよ」とは言われるんですが、あんまり読むのが好きじゃないんです。参考にするという意味では、僕の場合は小説よりも映画とか漫画とか実際の体験からストーリーの着想を得てます。

今回、「おきなわ文学賞」で受賞したのは『20年の眠りと涙を一粒』という、これは、子どもが生まれた時にお酒をカメに入れて20年後大人になったら親と一緒に飲もうっていう沖縄の「誕生酒」を題材にした作品なんですけど、僕の家でも親父が誕生酒を用意してくれていたので、去年それを開けて飲もうかってなった時にゴキブリがたくさんぷかぷかしてて、「もう飲めないね」ってことになったところから、「誕生酒」の話を書こうと。実際に自分の身の周りに起こったことから着想を得ることが多いですね。

―作品を通じて、沖縄を意識しますか。

しますね。今取りかかっているのは、太平洋戦争中に朝鮮人軍夫が阿嘉島に連れてこられて、日本軍の労働をさせられるんですけど、そこで朝鮮人軍夫の虐殺があったんですね。沖大の授業でそれがあったことを習ったんですけど、今度それを書いてみようかなって思ってます。

―重たい作品になりそうですね。

それはそれで価値があるんです。明るく楽しく読める作品も好きなんですけど、やはり沖縄の人にしか書けないメッセージというのがあるんだったら、やっぱりそういうのを書いていきたいなって思ってるんです。

―時代背景なども。

いろいろ勉強しなければならないので、この前ジュンク堂で朝鮮人軍夫の本を買って、今読んでいるところです。

―沖縄県文化振興会の「おきなわ文学賞」だけじゃなくて、琉大の「びぶりお文学賞」でも受賞されましたね。

こっちは、沖大生を主人公にしているんです。O大学の稲福君。キャラクターは架空なんですけど、福祉文化学科の学生で、彼が実習に行くという話なんですね。実習先でいろんな人と出会って成長していくという話。これは近々『びぶりお文学賞』の作品集が発行されますので、ぜひ読んでみてください。

―沖大図書館に琉大図書館から送られてきますので、楽しみにしています。

沖大の学生が受賞したよって、紹介してくださいね。

―4月の「沖大図書館報」で比嘉さんの紹介を考えています。

ありがとうございます。新入生にバレますね（笑）、文芸部員増えるといいですね。

―ところで、普段はどういう生活を？

けっこう荒んでますね（笑）。朝起きて、学校行って、昼ご飯食べて、それからバイトを24時までやっているので、もう書く時間があんまり取れてないですね。たまに学校もバイトも休みの日があると、集中して書いたりとか。

―授業には真面目に？

はい。たまに休んだり、単位落としたりしますけど。

―普通の学生なんですね。

なんとか卒業できるかな、という感じですね。

―沖大の図書館をどのように利用してますか？

返却期限を過ぎて怒られる利用の仕方をしてます（笑）。

（12月15日　聞き手 本部笑里、後藤）

比嘉正人君は、沖縄大学福祉文化学科3年次で、２０１２年に発足した沖縄大学文芸部の発足時からの部員です。

『沖大文学』創刊号（２０１２年11月）に小説「狂人と物言わぬ芽」と「誰も知らない」を発表し、『沖大文学』第二号（２０１４年２月）には「秋 沙美代」のペンネームで、小説「かかしの青空」と「俺と彼女と黒い恋敵」を発表しています。

また沖縄県内の文学賞にも積極的に応募し、以下のような賞を受賞しています。

・「キラキラ」（第９回名桜大学懸賞作品コンクール短編小説部門優秀賞）
・「Cセット」（第９回おきなわ文学賞随筆部門一席　沖縄県知事賞）※
・「20年の眠りと涙を一粒」（第10回おきなわ文学賞　小説部門一席　沖縄県知事賞）※
・「クオリティオブライフ」（第８回琉球大学びぶりお文学賞小説部門受賞）

※は筆名が「秋 沙美代」

左後より　浜比嘉大祐、横山正見、前原友絵、長田敦希、與那嶺元貴、當眞嗣隆
左前より　前里桃子、仲地博学長、城間ひかり、平良悟子　11月13日（学長室）

本学の情報保障の取組が「新人賞」受賞

「第10回日本聴覚障害学生支援高等教育支援シンポジウム」（11月9日）の実践事例コンテストにて、障がい学生支援活動が「新人賞」を受賞しました。メンバーの城間ひかりさんに感想を寄せていただきました。

沖縄大学 障がい学生支援のこれまでとこれから

法経学科2年次
城間　ひかり

11月9日、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク主催の「第10回日本聴覚障害高等教育支援シンポジウム」がつくば国際会議場で開催され、500名を超える参加者が集った。私達メンバーは障がい学生支援活動に関わる学生6名とコーディネーター2名の計8名で、県内の大学からは本学が初の参加となった。

1日目は連動企画として、筑波技術大学を見学。同大学は聴覚及び視覚障がい者のための高等教育機関として開設された国立大学だ。情報保障が充実しており、障がいのある学生が学びやすい教育環境を整えている。私は、本学以外での講義中の情報保障の様子を見るのは初めてだった。本学では、聴覚障がい学生にパソコンもしくは手書きでのノートテイクという文字による情報保障を行っているが、同大学では、講師が手話を使い、同時に音声通訳とパソコンノートテイクが行われていた。利用できる情報保障が限定されないため、どのような人でも講義を受けやすい環境があることに驚いた。

2日目は、「10年を振り返ってこれからの日本を考える」というテーマで全体会からスタート。第1部の講演では、アメリカでの情報保障について知ることができた。日本との違いに驚いたが、その根本には「合理的配慮は善意ではなく社会的責務である」という考え方があることが分かった。差別の多い国だからこそ、ADA法などその差を無くしていくためのルール作りが徹底されていた。2013年に障害者差別禁止法が成立（2016年施行）するなど法体制が徐々に整いつつある日本だが、形だけでなく人々の意識改革も徹底する必要性を感じた。第2部のパネルディスカッションでは、聴覚障がい学生支援の課題について意見が交わされた。支援チームの組織化、専門家による調整とより高度な支援、支援活動への当事者の参加など、今後の支援に求められることが具体的に話し合われた。

そして、今回の最大の目的であった聴覚障がい学生支援に関する実践事例コンテストでは、本学の障がい学生支援の取組みを発表した。本学では障がい学生支援が始まって10年目を迎える。コーディネーターの一人である平良悟子さんは、本学の学生だった頃からこうしたシンポジウムに参加したいという思いを抱き続けていた。コンテストは各大学のブースを見て回る形式だった。本学のブースでは、学生歌をBGMに障がい学生支援を紹介するムービーを映写し、A1サイズの紹介ポスター掲示やこれまでの支援活動をまとめたファイルを用意した。私達は手話や筆談など、それぞれができる手段を用いて情報保障を行った。ブース発表では、2004年に支援活動を開始し、07年にGPに選定され、14年に聴覚に障がいのある当事者がコーディネーターになったこと、そして全学的な式典を含む学内行事でのスクリーンテイク、ゼミなどの講義と連携して支援の体験を行っていることなどを紹介した。興味を持って積極的に質問やアドバイスをしてくださる方、「皆仲が良さそうでいいね」と褒めてくださる方が多くいた。嬉しいことに、そのような支援を全く行っていないという大学が、本学の取組みにとても興味を持ってくださり、交流会をしようという話にまで発展した。

最後の全体会ではコンテストの表彰式があった。私達が目標にしてきた新人賞は、これからの取組みとさらなる発展に期待を込めて贈られる賞だ。発表の時、呼ばれたのは沖縄大学の名前だった。

今回の旅では、シンポジウム以外にも大切なことを学んだ。1日目の夜に、メンバー間でのコミュニケーションが上手くいかずに仲違いをしてしまった。2日目の朝には、互いの気持ちや反省点をきちんと伝え合うことでまた団結し、無事その後のプログラムに臨むことができた。今回のことで、本学の障がい学生支援はコミュニケーションを大切にしているといいながらも、まだまだ不十分な部分があることが分かった。しかし、自分の気持ちを正直にぶつけ合ったことで、互いの理解が増してより良い関係を築くことができた。これはメンバー全員にとっての大きな成長であり、これからの「沖大障がい学生支援」をより発展させていくために必要なことだったと感じている。この出来事を乗り越えられたからこそ、今回の新人賞受賞もあったと思う。

この二日間で、支援に対する姿勢や他大学の支援技術、本学障がい学生支援の今後果たす役割など、様々なことに気付き、学んだ。これらを本学に持ち帰り、シンポジウムに参加できなかったメンバーとも共有したい。

学生プラス（学生＋）の活動が「総務大臣賞」受賞

「学生＋」に総務大臣賞
あしたのまち・くらしづくり活動賞
進学で島離れる学生支援

12月5日（琉球新報社提供）

離島の中学生と語り合う「学生プラス」の活動が11月、2014年度「あしたのまち・くらしづくり活動賞」（あしたの日本を創る協会）の総務大臣賞を受賞しました。代表の玉城征也君の話を2回に分けて紹介します。

【前編】

―はじめまして。

法経学科3年、玉城征也と申します。石垣島の出身です。

―どんなことに興味を？

今経営にものすごく興味がありまして、「日経スペシャルガイアの夜明け」などで経営のノウハウとか戦略とかを観るのが好きで、将来は自分も経営者となって地元に貢献できる人材になれたらなと思っております。

―どんな仕事を。

観光業で会社を立ち上げることができたらなと思っております。

―いろいろ聞いてみたい。一番話したいことは？

自分たちは「想い」だったり「気持ち」というものをすごく大切にしております。離島の中学生一人ひとりと話をするとき、その子が言っていることが、その子が本当に言いたいことなのか、それとも表向きに言っているのか。活動していく中でも、自分たちはなぜこういう企画を行っているのかというのを大事にしております。

―では、そのあたりから聞こうかな。それともだんだんそっちの方に。

どちらでも、大丈夫です！

―いつから、そんなにシッカリしているの。

以前は全然違います。1年次のころは、自分が何をしたいのか分からなくて、そもそもなんで大学に入ったのかも分からなかったんですね。

―どうして沖大に。

沖国と沖大で迷って、それで学力の方が少し足りなくて、沖大なら大丈夫と言われましたので。本音を言いますと、志望理由が本当に見つからなくて、でも入試の時は、自分が勝手に作り上げた「公務員になりたい」という夢を語って入学しました。最初は法律コースだったんですけど、自分は経営に興味があるなと感じて、2年次から経済・経営専攻コースに変更しました。

―なぜ経営に興味を。

授業が面白くて。経済や経営に関しては本当に食い入るように、集中力が途切れないで授業を受けられるんですね。それで、やっぱり自分は法律よりも経済や経営に興味があるなと思って専攻コースを変えました。

―どこでスイッチ入っちゃったの？

自分、コミュニケーション能力が全くなくて、何とかしたいということで、ディスカッション、ディベート、グループワークなどとにかく話をしなければならない講義がありまして、1年次の時、自分たち頑張ろうということで無理矢理登録したんです。そこでいろいろあって、少しずつ改善していっている状況です。あの講義がなければ、真喜志さんに出会うこともなかったので。

―3月に卒業した真喜志さやかさん。

この団体って本当に忙しくて、「学業」「バイト」「学生プラス」の中でどれが一番忙しいかというと、学生プラスだとメンバーはみんな言うと思います。一つの企画に2か月前から時間をかけ、それが毎月ある状況です。しかも企画がダブったりして、一人2企画を持っていたりするので、メンバーはいろいろ追われている状況です。

―「忙しいから手伝ってほしい」と？

そう言われたら、無理だったと思います。「離島に行こうよ」って誘われたんです。その時誘ってくれたのが真喜志さんと宮内さんで、二人とも今年卒業された先輩ですけれど、この先輩たちが凄く魅力的だったんですね。講義でグループワークの時も上手に先導してくれるし、コミュニケーション能力が高いなと思って、どうしたらこの人たちみたいになれるんだろうと思ってた時に、「離島に行こうよ」って誘われたので、「あっ行きます」と二つ返事で行くことになりました。

―どちらの離島へ。

粟国島へ行かせていただきました。メンバーとしてではなく、ボラスタ（ボランティアスタッフ）として行かせていただきました。

ボラスタも練習をやるんです。中学生って高校生よりもデリケートですし、夢とか目標がない子たちもいるので、そうした中で、自分たちはその子たちの話をどうやって引き出せるんだろうということをまず考えなければいけないんです。練習なしでいきなり行くのはすごく失礼だろうということで、自分たちは練習プログラムを用意していて、一企画で7、8回、ボラスタさんもメンバーも練習に参加してもらえないと連れていけないよっていう決まりを設けています。

最初にボラスタで練習に参加させていただいたときに、こんなにまじめなことやるの？という感じで、自分の話だったり、いろんな人と交流したりしたので、「離島に行こうよ」って誘われたあの軽い感じじゃないみたいな、騙されたって思って。でも、実際に離島へ行ってみると、すごく楽しくて、子どもたちと話すのも楽しくて、何より、真喜志さんと宮内さんの魅力がもっと倍増してきて、また波平という凄い存在も出てきて、なんだ、この活動は！みたいな。それでもっと学生プラスに関わりたいなと思って、メンバーに入ることになりました。

―どのような練習を。

練習では、学生が、中学生役のメンバーと話をするのですが、話し終えるとフィードバックだったりをしてどんどん改善をしていくということを7、8回やります。中学生の学年ごとにテーマを決めますので、そのテーマにそって練習しますし、それぞれのテーマも企画メンバーが考えています。

―企画メンバーとは？

毎週月曜日に定例会がありまして、その定例会で自分たちが考えたテーマがちゃんとしたテーマなのか、企画にふさわしいのかというのを企画メンバーで議論して、そこで通ったらボラスタさんとも共有するという形になっています。

―玉城君がリーダーを。

企画ごとにプロマネ（プロジェクトマネージャー）がおりまして、このプロマネが主体となって、今はこういうことをやるべきだと。例えば離島へ行くのであれば、交通や宿泊の手配をするべきだと。それから私たちが離島に行かせていただいた時に、地域の方々との飲み会などでお話をさせていただいて、そこで生徒のことを共有します。「生徒はこういう話をしました」「こういう夢や目標を描いています」というのを保護者や先生方と話して、「そうか、そういう夢を持っていたんだ」ということをお互いで共有できる場を設けているんですね。そうした場を設けるための手配であったり地域の人とのやり取りというのも、プロマネが主体となってやっております。

―地域の人とは？

粟国島だったら、教育委員会の方、

それから粟国中学校に通っている生徒の保護者の方々をお招きして、お話をさせていただいています。担当の方に、自分たちはこうした機会を設けさせていただきたいんですけど、とお話させていただいて、そこで担当の方が場を組んで下さったり。今年の9月は、西表島と北大東島でやらせていただいて、西表の時は担当の方が本当に協力的になって下さいました。

―担当の方とは？

西表では、学校の先生とやり取りさせていただきました。その担当して下さった先生が、校長先生、教頭先生、職員の方々を呼んで下さって、自分たちメンバーとごちゃ混ぜになってお話をさせていただいて、すごい熱い話を聞きましたね。子どもたちに対する想いだったり、教育に関する想いだったり、西表に関する想いというのを聞けました。

―どうやって担当の方を見つけるのですか。

つながりのない島では、最初に学校や教育委員会に電話をして、私たちこういう企画をさせていただきたいんですけれど、という話をして、「じゃあ企画書送って」と言われるので、「分かりました、企画書送らせていただきます」と電話でのやり取りを通して、担当の方から連絡が来るという流れです。

―今年はどの島で企画を。

今年は6月の粟国企画から始まりまして、9月に粟国、西表、北大東。そして12月に粟国と渡名喜。年6回の「離島語り愛」活動をやらせていただいております。

―「離島語り愛」活動とは。

自分たちの活動には2本柱があります。15歳で島を離れる離島の中学生を対象にしている活動と、実際に15歳で島を離れて現在本島で高校生をしている子たちを対象にしている活動の二つです。

先ほど紹介させていただいた「離島語り愛」活動は、島を離れる前の子たちを対象にした活動で、年6回。島を離れた離島出身の高校生を対象にした「シマ塾」活動が年4回です。

―ところで、初めての粟国島では、練習通りに？

全然できなかったですね。練習をたくさんやったんですけど、やっぱりどうしても緊張しましたし、一対一ということですごく上がってしまって、その緊張が中学生に伝わってしまって、中学生が壁張っちゃうと本当に心を開いて話してくれないので、その子のやりたいこととかをなかなか引き出すことができなかったですね。難しかったです。

―辞めようとは思わなかった？

辞めようとは思わなくて、その時は「できなかったー」という印象だったんですけど、それよりも周りの方々が凄いということの方が強烈な印象で、自分もメンバーになりたいという想いの方が強かったですね。

―島のことで何か垣間見えたことは？

なにも分からなかったし、問題意識も全然なかったですね。中学生とただ話しに行く、ということで自分は行ったので、問題意識もまったくなかった状況で、その時は全然だめでした。

―問題意識が出てきたのは？

粟国島で働いている波平と話す機会がありまして、学生プラスを立ち上げた初代の代表ですから、想いというものが凄まじかったんです。

波平自身が多良間島出身で、多良間から宮古高校に進学するのですが、小学校から中学校まで1クラスでやってきた中で、いきなり6クラスもある大きな高校に進学して、なかなか友達のつくり方が分からなかった。それで2か月ほど友達ができないという状況が続いて、そこで波平は友達をつくる方法を思いついたんですね。その方法とは、波平は一人暮らしをしていたので、その一人暮らしを活用して友達と夜まで一緒に遊ぶという方法だったんです。やはり夜出歩いている子たちって、ちょっと悪いことをしちゃう生徒が多くて、そうした生活がどんどん悪い方に向かって行って。でも、親からは「大学は出てくれ」と言われていたので、大学には入った。しかしやっぱり高校の時の生活を引きずって、ずっと飲み会をしていた時に、自分は何のために大学へ来ているんだろう、親があんな高い学費を払ってくれて自分はなんで意味もない学生生活を送っているんだろうと思いながら、1、2年のころは教室でも一番後ろで寝ている学生だったらしいんです。早く講義が終わらないかなと、ずっと待っている学生だったらしいんです。それで、2年の終わりの時期に大学に通っている意味が分からないからもう辞めようと、退学届を取りに行こうとしたらしいんですけど、大学にあまり行ってなかったので退学届をどこに取りに行けばいいのかすら分からなくて、間違って違う部署に行って、「自分、大学辞めたいんですけど」って言ったら、そちらにいらした人が波平を変えてくれた人で、「まて」と言われて、お前は人のせい、環境のせいにしているようだけど、自分で何をしてきたんだという話をされたらしくて、そこで波平自身が本当に衝撃を受けて、自分何もしていない、変わらなきゃって強く思ったらしいんですね。強くそう思った瞬間に今の波平ができたようなもので、スイッチが入って、その場でバイト先に「自分、やりたいことがあるのでバイト辞めます」と電話をしたらしいんです。それでどんどん波平が変わってきて、実際に変わっていくと、周りの環境も変わってきて、付き合う友達も変わってきて、意識の高い学生にある場所に連れて行かれて、そこには大学生が夢とか目標とかビジョンとかを熱く語っている姿があって、同じ大学2年生なのになんでこんなにも違うんだ、こんなに夢を熱く語れるんだ、想いを熱く語れるんだと衝撃を受けたらしくて、自分も何かそうしたことをしたいと考えたらしくて、こうした意識の高い大学生を離島に連れて行くことが出来たら、高校の時の波平、大学2年生までの波平を生まないで、意識の高い学生を生むことができるのではないかと波平は思ったらしいんです。それで、意識の高い大学生を離島へ連れて行くということを思いついたらしくて、そこで沖大のメンバーをかき集めたというのが、2010年に学生プラスができた経緯です。

波平自身も、15歳で島を離れる際に、明確な夢とか目標がなくて高校へ進学してしまったから、自分はこういう形になってしまった。だからこそこういう熱い想いを持って夢を語れる、目標を語れる、ビジョンを語れる大学生を島へ連れていくことで、中学生にも夢、目標が生まれるんじゃないか。生まれてくれれば、高校でもしっかりと自分の夢とか目標を掲げて、生活してくれるんじゃないかということで、やはり島を離れる前が大事だということをすごく強く感じたらしくて、離島の中学生を対象にした活動を最初にさせていただいています。

―波平さんと玉城君は似てますね。

波平は15歳で、自分は18歳で島を離れてという形なので。

最初に粟国に行ったときに波平の話を聞いて、熱い方だなと、この学生プラスはすごい活動だなと。波平と話す機会があって、意識を持てたのはすごく良かったです。

（11月27日 聞き手 後藤）

後輩の上原優花さんと玉城征也君

卒業生インタビュー

今から思うと、あのエネルギーはなんだったろうと思います。

毛利 孝雄さん
（2013年3月 法経学部卒）

「学生達と積極的に交わり、学生を誘い地域を訪ね、沖縄の問題を共に語り、読書会に参加し、若い学生達へ知的刺激を与え、主体的に行動することを自らの姿勢をもって示した」として、2013年度学長特別賞を表彰された毛利孝雄さん。東京の会社を定年退職後、本学に編入学し、どのような心境で学生生活を過ごされたのか。卒業して一年半ぶりに沖大を訪ねに来られた機会に、学生時代を回想してもらいつつ今の想いを聞いた。

―社会人を経験された毛利さんが沖縄で学ぶことになったのは？

僕が初めて沖縄に来たのは1999年で、そんなに古い話ではないんです。今、沖縄で焦点になっている辺野古だとかの問題は大体1995年の事件から始まっているけど、本土にいた僕がそれを知ったときは、「そういうこともあるか」という程度の認識だったような気がします。

行政が区民を沖縄、広島、長崎に派遣する平和のスタディツアーを毎年やっていたのですが、僕は99年にそれに応募して、会社の休みを取って沖縄に来たんですね。

少し昔の話になるけれど、68年から5年半くらい一回目の学生だったときがあって、そのとき70年安保と72年の沖縄返還がありました。70年安保も実質的には沖縄問題だったと言っていいと思いますが、そういう中で東京周辺のデモや集会に参加したりということはあって、その程度の知識はありました。でも99年に初めて沖縄に来て、愕然としたのは、一つは6月23日が慰霊の日だということです。話は聞いていたと思うし本でも読んだことはあったと思うんだけど、それを記憶し得ていなかったということです。それから修学旅行の通常ルートを回るということだったんですが、一番、話を聞いて思ったのは、ひめゆりの方の話で、もちろん話の中身も大変ではあるんですが、自分が話せるようになるまでに30年かかったと言われていたんですね。チビチリガマ、集団自決のガマというふうに言われていますが、チビチリガマの場合も38年の間まったく表に出なくて、戦後石垣の方に移住された方のひょんな話からたまたま明らかになって、知花昌一さんが調べてわかるようになった。

そういう30年とか38年の沈黙、そういう時間、そのことについて自分は戦争の悲惨さを言葉では言ったり、沖縄戦では四人に一人が亡くなったということの知識はあったけれども、四人に一人が亡くなるということは一人ひとりの人生の中にどういうものを投影していったのか。30年も話すことができない、38年の沈黙。それはどうなんだろう。チビチリガマの場合だったら、生き延びている人たちは被害を受けた人か、自ら家族を、手をかけて生き延びざるを得なかった人たちなので、死ぬまでしゃべらずに生きようとしたと思うんですね。ただ話せないということは、どれだけ辛いかということだと思うんです。知花昌一さんから話を伺った時、「ぽうぼうに草が生えていて、あそこにガマがあることを知らなかった。だけど一人の人がしゃべり始めたら、一気に、一週間でほとんどわかった」というふうに言われていたんですね。それは、本当は自分の中に沈めておきたいけど、どこかで話しておきたい、やはり自分の人生の中で起こったことだから、そのことを否定して生きることはどんなに辛いことかということだと思うんですね。

そういうようなことを考えさせられて、学生のころからの経験で言えば戦争につながるものには反対だということを自分の考え方の柱にしてきたつもりですけれども、自分が戦争反対だとか言ってきたことの底の浅さみたいなものを沖縄から突き付けられたという感じがして、打ちのめされる感覚だったんですけれども、そういうことがあって、やはり自分の中で拠り所としてきたものをはっきりさせたいということがありました。

それは、今はもっとはっきりしてきていますが、今の政治の動向で行くと、集団的自衛権、秘密保護法といった戦前と同じようなものが準備されてきているということもあって、そういう中で戦争には絶対反対なんだということをもう一度自分の中で創り直していくというときに、やはり「沖縄から学ぶ」ということは避けて通れないんじゃないかと思ったんですね。沖縄から学ぶことを通して自分自身をもう一度、あるいは戦後の民主主義ということをもう一度考え直すことができるのではないかというふうに思ったんです。

―なぜ沖縄大学に？

多少、沖大の歴史は知っていました。99年からその後少しずつ勉強するようになって、沖大が戦後の復帰に際してどういう立場をとって、学生や教職員のどういう活動の中で今のように残るようになったのかということについては知ることができたので、沖縄の大学で学ぼうということで考えたら沖大以外に選択肢はないと自分では決めていました。

―大学に入るということは必要だったのですか？

それはね、やはり自分たちの世代は、直接の戦争体験はないけれどそう若くはない。50歳を過ぎたくらいから、やはり自分たちも若い人たちに対してどういうものを残せるのかということを考えなければいけない。それでもう一度学び直すとすれば、若い人たちと一緒に学ぶことができればそれが一番嬉しいことだなと、そうするのがいいなと思って。普通の学生の人たちと一緒に勉強したり、話が出来たりすれば、それが一番自分にとって勉強になるかなと。

沖縄に行って学ぶという場合には、一般の大学の大学生として学ぶようにするということと、沖大を選ぶということは、自分の中では、その条件でやるんだというふうに決めていました。

―ご家族にはなんと？

二年間という期限付きということで、お願いをして、何とか。まぁ、言い出したら聞かないと思っていたのかもしれないですけれど。

―若い学生たちとの関係は？

どうなんだろう、自分でもなぜ二十歳前後の年の離れた人たちと会話が成立したのかということが、今でも自分ではよくわからなくて。世代間の交流というのはなかなか難しいと思うんですが、同じ土俵でいろいろ議論ができたりというのは、自分も一学生として一緒に学ぶ立場にいたということだというふうに思っていますけれど。

―毛利さんといると、対等な感じがしますね。

そうであったとすれば嬉しいですけれど、それでもまぁいろいろ話をしていると、どうしても上から見たような感じで、あれ言わなければよかったなと思うことは何回もありましたけれども。でも、むしろ学生の人たちといろいろ意見交換をする中で自分の考え方が正しいとか、やろうとしていることで引っ張っていくとかいうことではなくて、「あっそういうことか」というふうに考えさせられながらみんなでいろいろやったということだと思います。辺野古だったり、高江だったり、学内でオスプレイのことだとか、基地の問題を考えるだとか、それは自分が中心になってというよりも、多少の経験はあったので、そこの部分で自分はやれることはやるというふうに思いましたけれど。

―学生たちとよく現場へ行かれていましたね。

１６０９年の薩摩侵入以降のことや沖縄戦のこと、米軍支配下でどういう動きがあって72年の本土復帰に至ったのかとか、その辺は沖大に来て学んだことがほとんどすべてと言ってもいいぐらいだと思うのだけど、それを学生と同じ立場で学んでいるということで言えば、今の辺野古の問題につながる基地問題であるとか、72年の返還後の沖縄の政治状況を形作っていったものがどういうものかを考えられる現場があるというふうに思います。それは大学の中だけということではなくて、戦争体験をもった世代や復帰闘争を担った人たちがいろいろに動かれているのを自分たちもそこに駆けつけてそこで交流したりする中で学んでいったということはあると思います。その条件はもちろん沖縄社会が形成してきたものだというふうに考えていいのではないかと思います。

―授業の様子はいかがでしたか？

一回目の学生の時はゼミが20人くらいで、講義は百人、二百人というのが当たり前だったんですね。だから、沖大の授業に出て正直びっくりしました。ゼミと同じくらいの人数で先生とキャッチボールをやりながら、授業をする人と聴く人ということではなくて、そういう温かさみたいなものが授業の中にあったと思います。沖大の多くの授業で、僕はそういう印象を持っています。

それと、「マチおこし」だとか「シマおこし」で現場を大切にした授業は、大学の中だけで学ぶというものではないし、生きていくための自分たちの社会をどういうふうに創っていくのかという問題意識は、東京にいるとなかなかそういう実感は持てないんですね、もう大きすぎて。それは僕が沖縄から帰った時に思いました。沖縄社会の中にいると、人の顔が一応見られる範囲だろうと思うんですね。沖大もこの人数だから、2年間いれば知り合う学生の人たちも多いし、「今どうしてるかな」という関係にもなるけれども。

今法政大学の授業にもひとコマだけ参加するようにしているんですけれど、受けている学生は七百人ですからね。それは大学だけではなくて、東京というシステムそのものが人間同士がコミュニケーションを取りながら社会を創っていくということからは著しく大きくなりすぎている。自分たちが考えたとしてもそのことを実践して、生きることを通じて自分たちが地域を創っていくとか、そういう実感をなかなか持ち得ない社会になってしまっているという感じがするんですね。そういう点では、沖縄は人間が創っていける、そういうエネルギーをまだ持ち得る規模だと思います。

―沖縄大学の「地域共創・未来共創」というミッションを、沖大は叶えられる条件にありそうですね。

それが沖大と沖縄社会の持っている優位性ですね。沖大の提起というのは、大学として実践的にやっていくことで大きな価値を生み出すことができる、学生もその中で学ぶことができる、そういうものとしてあるということは間違いないと思います。そういう時代のニーズに応えていくという点で言えば、学生の人たちはもっとそこのところを自覚していくということは大事かと思います。

―2年間の在学中に卒業論文も完成させました。

今から思うと、あのエネルギーはなんだったろうと思います。

沖縄に来る経緯がそういうことだったので、沖縄戦、それから沖縄の戦後史を生きた人がどういうような気持ちで自分自身の人生を見つめてきたのか、そして沖縄の現在を形作っている戦争体験から発するものをできるだけ取り上げてみようと思いました。

先ほどの話で言えば、四人に一人が死ぬということがどういうことなのか、できれば戦争体験を持った人たちに聞き取りをしながら考えるようにしたい、一人ひとりの人生の中で戦争体験、あるいは戦後の占領期の体験というものがどういう意味を持ったのかということを感じ取ることができれば、というふうに思って、そういうところに焦点を当てて書いたつもりではあります。

―「沖縄から学ぶ」は成りましたか。

９割方は。

自分で「頑張った」なんて言うのはおこがましい話かもしれませんが、あれだけのエネルギーが自分の中にもあったんだなというふうにあらためて思うことができて、今あれだけの力を出し切れるかというと、なかなかそれだけの気持ちを維持するのは難しい。そういう条件を沖縄の社会が与えてくれたということだと思うんですね。

戦争体験を何人もの方から聞き取りをしましたけれども、同時にオスプレイに対するいろいろな活動が活発になって、それは大学の中だけではなくて、沖縄社会の中でいろいろな動きが出て、県民大会にもみんなで参加しましたし、それに先行して辺野古や高江でもずっと現地での活動があり、オスプレイの配備以降は普天間のゲートでずっと抗議活動が続けられているし、そこに自分も足を運びながら知り合った人たちにいろんな話を伺ったことは、大きな宝物になっています。

今回も辺野古に行ってきたんですけれども、もちろん基地は早くなくなった方がいいし、オスプレイもいなくなってほしいけれども、あの県民大会からその後のいろんな活動がなければ、僕は今知り合えている沖縄の人たちと知り合うことができなかったと思います。そのことと繋がっている人たちと知り合うことができたということはすごく広がりのあることで、「沖縄から学ぶ」というときに、大学の授業からだけということではなくて、そういういろいろなところで知り合って交流する中で教えられました。

―卒業されて1年半になりますが、今はどのように？

沖縄に来ていた時は自分も沖縄に住んでいる一人としていろいろ発言したりすることもあったのですが、やはり戻れば本土から見た沖縄とい

うことになるので、半年くらいは悩みました。どうするかは一度整理をした上で、自分のやりたいことも別にあったものだから、そっちの方にシフトしながら時々沖縄のことも考えるかというふうに考えた時期もありました。しかし辺野古の問題がかなり重要な段階に来て、沖縄の中でそのことで頑張る人たちが発信をし続けて、本土でも辺野古や高江に行ってきたという人たちが出始めました。そうするとやはり自分も少なくとも2年間学ばせてもらったということで考えると、自分なりに沖縄の問題について発信できる部分があるのではないかというふうに考えて、今年の1月から「私でよかったら呼んでください」ということで、どんな小さな集まりでも呼ばれれば、沖縄の人が話すのが一番いいのかもしれないけれども、本土から行った人がどういうふうに沖縄の問題を受け止めているのかということを伝えるのも、本土で話をするということの中では必要なことかなというふうに思ってそれをやり始めています。

それで結構ね、いろいろ話をする機会をつくっていただいているんですよ。自分でもびっくりしています。それは自分が何かをやっているという意味じゃなくて、やっぱり沖縄の民衆運動というか、新崎盛暉先生が特に強調されていることだと思うんですけど、95年以降に紆余曲折あったかもしれないけれども、沖縄が創り出したものがやはり本土の方の意識を変えてきているということだろうと思います。それがなければ、こんなに呼ばれることはないので。

しかも全国で考えれば、沖縄のことについて勉強しようという集会が毎日のようにどこかで開かれていて、自分もその中の一つにはなれているのかなと思うんですけれども、それは凄く強くこの間感じています。自分が行くところにも、必ずそこに沖縄で交流してきた人がいて、その人たちがそういう集まりや学習会をつくる中心になっているんですね。辺野古18年間、高江8年間ですけれども、ああいう現場を維持して、小さいですけれども一人、二人受け入れてそこで交流していって、人と人を繋いでいって、そういうものを創りつつあるという、そういう今までにはない人の繋がりの中での沖縄問題ということになってきているのではないかというふうに思っていて、僕はそういう部分にすごく希望を感じています。昔みたいに大きな集会を開いて政府に圧力をかけるということだけではなくて、一人ひとりがそういうふうに気持ちを寄せ合いながら沖縄問題を考えるということが出来つつあるというのは、一つの希望として温かいものを感じています。

じつは沖縄だけじゃなくて、原発の問題だとか地域が疲弊していく中でどういうふうに自分たちの生きる場所を生きやすい場所として創り直していくかというときに、これは共通したことのような気がするんですね。その点では沖縄が創り出しているものの日本社会に与える影響の大きさ、そのことに沖縄の人たちにも気づいてほしいし、本土の人にはもっと気づいてほしいと、そういう気持ちがあります。（10月16日　聞き手　後藤）

生活（暮らし）の思想
野本三吉という生き方
～生きること、それが僕の仕事～

加藤彰彦先生　最終講義要約（後編）

1941年　東京生まれ
2002年度　沖縄大学赴任（人文学部教授）
2010年度　沖縄大学学長（2013年度まで）
2014年4月　沖縄大学名誉教授

（前号からの続き）

五　沖縄へ

２００２年９月11日、アメリカで飛行機が世界貿易センターに突撃しまして、あれを見ていたときに地面の底が抜ける感覚でした。もう人間の未来はないかなぁと思って、ものすごく怖かった。人間は大変間違ったことをして来ちゃったという感じですね。

そこから受けた衝撃で僕は、人間はもう一度生き直さなければならないというか原点に戻らなければならないと思ったんです。どうしよう、大学（横浜市立大）にいても無理だなぁと思って。

いろんな経緯があるんですけど、そのときに沖縄大学が児童福祉を募集していることを知りました。友達がどこか大学の先生になりたいんだけれどと言うので、友人のを探してあげようと思って見つけたのが沖縄大学だった。そこに児童福祉募集と書いてあった。正直これは沖縄に行けということだなぁと思って、僕は家内にすぐ電話をしたんです。今友達のを探していたんだけど、沖縄大学で児童福祉の教員を募集しているんだけど、どうしようかなぁと言ったら、妻は「電話をかけてきたということは行きたいんでしょう」って言っていただきました。

それで二日ぐらいの間に応募書類を書いて、面接をしていただきました。今日はそのときの先生方も何人かいらっしゃると思うんですけど、ありがとうございました。児童福祉の募集は50歳未満って書いてあったんですが、僕そのとき60歳だったんです。歳のことは全然頭になくって、それで応募したんですね。そうしたら面接をするという連絡をいただいて、多分大学では大激論だったと思うんです。

沖縄大学に受け入れていただいて本当に感謝していますが、僕は２００２年に沖縄大学に来ることになりました。夢のような話で、沖縄大学が持っていた自由さ、すばらしかったですね。学生諸君と過ごすことも本当に楽しかった。学生諸君と一緒にやっていたらこんな楽しいことは無い。ゼミ合宿をやったり、日々一緒に悩みを語り合ったというのは本当に素敵で、沖縄大学ってすごいなぁって思いました。僕はそのときに、沖縄大学は日本一の大学だよと言っていたんです。本当にそう思った。日本一の沖縄大学に来れて本当に幸せだと言うと、みんな「えーっ」と感じたと思うんだけど、本当にそう思っていたんですね。

そんなに長くいると思っていなくて、せいぜい5年間でお終いだなと思っていたら、不思議なご縁で12年間沖縄大学にお世話になりました。本当にいろんなことがありまして、島巡りもその間にしましたし、沖縄の子ども達のことをいろいろやらせていただいたので『沖縄・戦後子ども生活史』（現代書館）という子ども史をまとめることも一応できたと、こういう流れがあります。

あっという間にこの72年が経って、気持ちは若い気持ちでいるんですけど、目がだんだん見えなくなりますよと医者から言われていまして、見えなくなっ

ていくとすればその間に自分は何をしたらいいのかということを考えているところです。

僕は今まで「見る」ということを具体的にものを見ることだと思っていたんですけど、この数ヶ月の間だけで言いますと、これから先もっと変化すると思いますけど、「見る」というのは具体的に目に見えることではなくて、感じるというか目をつぶって見えるものなんですね。

最近は昔ほど夢をあんまり見ていないんですけど、夢を見たんですね。ビラが一枚配られてきまして、非常にはっきりしている。なんと、ビラに小田実さんの講演会があるって書いてあったんです。たぶん同志社大学の講堂と思うんですけど、はっきりそういうことまで出てくる。小田さんに会いに行こう、もう亡くなっているなんて夢の中では忘れていますから、僕は階段教室の古い講堂に行くんですね。小田さんは教壇に立っているんじゃなくて、階段教室の真ん中あたりの席に、毛布か何かをいっぱい体に巻き付けて座っているんですよ。小田さんだとすぐにわかったんだけど、髪が真っ白なんですね。他には小田さんの面倒を見ていらっしゃった女の人一人以外誰もいなくて、僕は講堂へ入って行って小田さんに近いところの椅子に座ったんですね。一人しかいないなぁと思って。そうしたらその日のレジュメを私に下さるんです。手書きなんですね。手書きのレジュメのタイトルに、「木」偏に「棄」と書いてあるんですよ。これは夢が覚めてすぐに辞書を調べたんですけど、辞書にないんです。

それで小田さんが話し始めるんですけど、「見えないものを聞く力、忘れられたものを見つけ出す力、これを持って欲しい」って言うんですよ。「僕もいつか忘れられる。見えなくなっていく。でも忘れないで欲しい」と、こういうことをとつとつとおっしゃるんです。すごくわかるんですね。捨てられていったもの、隠されてしまったもの、忘れられたもの、そこを見捨てないで欲しいと言うんですね。大きな樹木も年齢が来ると倒れて朽ちていく。しかし「木」偏に「棄」は、朽ちても蘇る。木が倒れたらそこから新しい芽が生えてくる。朽ちた大木の中から新しい命がだんだん萌え始めて新しい時代を創るという意味だと僕は聞いたんです。自分は伝えたいんだと、そのことを伝えたいんだけどあんた一人しかいないと。正確には覚えていないんですけれど、とにかく寂しいと。聞く人がいなくて寂しいと、みんな忙しい時代だなって言うんですよ。みんないろんなことで忙しいけれど、いちばん大事なことは見えないものを見る力、聞こえないものを聞く力、忘れられたものを掘り出す力、そして捨てられたものを蘇らせる力、こういうふうに小田さんは繰り返しおっしゃって、そして戦争中の話をぶぁーとするんです。小田さん僕より10歳くらい上ですから、大阪で戦争中10歳前後だったと思うんですけど、そこで起こった出来事をぶぁーと語るんです。僕は聞きながら涙がぼろぼろ出てきたんだよね。大変だったろうなぁって。自分のことも思い出しますけれど、それ以上にすごかったからね。そうして最後に、伝えたい、このことを残しておきたい、自分もいつか忘れられ捨てられていく、でも残しておきたい、こうおっしゃったんです。それで僕はみんなに伝えなきゃいけないと思って、みんなを呼んでこようと思って後ろを向いたんです。そうしたら人がびっしりいるんですよ。満員になるぐらいいるんですよ。僕は立ち上がって、他の人にも声をかけようと思って外に出たら外にもいっぱい人が並んでいる。

これはなんだろうな、僕は夢から覚めてノートにそのまま書いたんですよ。今小さな個人通信「暮らしのノート」というのを出しているんですけれど、そこにそのまま載せてみたんです。小田さんなんだけど、途中から田中正造のような気がしてきたの。だって小田さんの雰囲気が田中正造によく似ていたと思うんだよね。

今の時代は大変厳しい時代に入っています。沖縄の現実というのは沖縄に来て一緒に暮らしてみないとわからなかったことがあまりにも多いんですが、やっぱり地域の皆さん、沖縄の方達が一生懸命反対をしていても、辺野古でもあれだけの長い期間やっていても、なんと言っていいか、切り捨てですよね。本当に申し訳ないという思いでいっぱいですが、そのことでも僕は必ず変わるんだと思っています。僕は沖縄に来させていただいて本当にありがたいと思っていますが、沖縄でこの12年間経験させてもらったことは僕は忘れないと思いますし、そこで出会った人達から教えていただいたこと、伝わったことというのは、次にまた伝えたいと思っているんですね。

Ⅲ 生きること、それが僕の仕事

レジュメの終わりの方に「70代→暮らしへの回帰」と書きました。今まで職業というのが大事だと思っていたんです。何の仕事をするかというのが大事だと。僕はいろいろな職業をやってきたんだけど、本職というか自分が生涯貫くものというのは具体的な職業とか職場ということではなくて、それは生きることだと思ったんです。生きることは全てに貫いている。どんな職場に行こうと生きるということを原点にやらなければいけないということがはっきりしてきたということがあって、生きることが自分の仕事だと。生きることの中には、食べることから、一人と話をすることから、誰かを助けることから、いろんなことが入ってるわけです。生きることそのことが仕事だと、自分の中でそうなってきました。

数年前に僕の大変親しい友人で、そこら中飛び歩いていろんな活動をしていたジャーナリストの方が脳梗塞で倒れまして、歩けなくなって、手も使えなくなって、たどたどしい手紙でもう生きてるのが辛いと、死にたいと。奥さんもすごく悩んでおられて、食べてくれればいいんだけど食べられないと言っていると。僕はどうやって励ましていいかわからなくて、そのときに口から出まかせに言ったのがこの言葉だったんですね。生きることがあんたの仕事だよと、食べなさいと。食べることが生きることだろ、食べる、それがあなたの仕事。トイレでちゃんと尿を出すこと、大便をすること、これがあんたの仕事。それからちょっと立てたら立って、一歩、二歩、歩くこと、それが君の仕事だよって言った。その後彼は手紙を下さって、すっきりした、生きることを今までそういうふうに考えていなかった、食事ができなくなったとか今までやれていたことがやれなくなったことで自分を全否定していたと。そうじゃなくて今自分ができることをすればいいんだと。そのことが自分の生きること、それはもう自分の仕事だと、食べることそのことが仕事だと。彼は今立ち直っておられます。いろんな活動に参加されて、まだお体は不自由ですけど、僕の書いた「暮らしのノート」なんかに非常に的確な文章をいただ

いて、すごいなぁと思うんですけど、見事に生きておられる。

だから職業ではないんです。職業はできないかもしれませんけど、生きている。そしてそれは間違いなく仕事をしていると今思えて、僕自身も見えなくなったとしても生きられるなぁと感じています。それが僕の仕事なんだと。だからどこか他の人と比べて出来ないことがあったりわからないことがあったりしても、自分が今できることをする、精一杯それをすること、それが生きることだし僕の仕事だと思っています。

今日もたくさんの皆さん達の中でこんな話をさせていただけるというのもちょっと恥ずかしいんですけど、自分の実際の生活は恥ずかしいことだらけなんですけど、嬉しいですね。これは仕事だと思っています。だからやらせていただけることがあって、自分がやりたかったらそれを積極的にやるということでいいのかなぁと思っています。

来月の卒業式で僕も最後になります。今どういうことを話したらいいのかなと思っていて、こんなふうに話せたら素敵なんですけど、卒業式ってすごく固くなりますので、緊張してなかなかできないでいるんですけど、やっぱり「生きること、それが仕事」ということをどうやって学生諸君に伝えられるかなと思っています。

もう一つ言うと、今日受付で売っていただいている大倉直君の本『命の旅人』の最後のところに書かれていますが、彼の大親友、加藤史明君という青年がいて、この方は和光大学の学生だったんですけど沖縄大学に一年間いらして、新崎盛暉先生のゼミにも入っていました。

東京に帰ってから小学校の先生をやっていたんですが、40歳そこそこで脳の病気になってしまい亡くなるんです。大倉直君と加藤史明君は親しい仲間だったものですから、大倉君はしょっちゅう北海道からやってきて彼を見舞い、励まし、メールのやりとりを一生懸命するんですけど、彼が亡くなったときに落胆するんですね。

僕も加藤史明君のことをよく知っておりまして、大倉君が「友人が亡くなっちゃってどうしたらいいだろう、どう考えたらいいだろう」と言われたんですね。本のそこだけ読んでみます。

野本はしばらく黙っていたが「不条理だよなあ」とつぶやくように口を開いた。野本と比べれば二十七歳も若い男が死んでいこうとしているのだ。私が言葉もなくうなずいていると、野本はこう続けた。

「人っていうのは人間関係の総和なんだと思うよ。誰かと出会って交流することで、人は変化するよね。それは相手に影響されて、つまり相手の存在が自分の中に入ってくるということでしょう。そのうちにどこまでがもともとの自分で、どこからが相手の影響なのかわからなくなっていくよね。相手の中にも自分が入っていく、その人のなかでも同じようなことが起こる」

私は無言で野本の話を聞いていた。

「つまり僕の周りにいる人すべての人が僕の中では生きているし、僕自身もみんなの中で生きている。人っていうのは人間関係の総和なんだ、と」

（『命の旅人 - 野本三吉という生き方』現代書館、「エピローグ」より）

大倉君は本にこう書いてくれて、その友人は亡くなって遺稿集を書いて、それには新崎盛暉先生も私も、それから沖縄大学で記録文学を教えておられた堀江邦夫さんという『原発ジプシー』（現代書館）を書いていただいた方の三人で推薦文を書いたんです。

彼が亡くなっていくそのときに、彼の亡くなっていくところに大倉君は座りながら「どこまでが彼でどこまでが自分かわからなくなってきた。そしてお互いの間でいつの間にか相互浸透してきた人生がある。彼は死んでいない」と最後に明言しているんだよね。自分の中に生きている限り彼は生きていると言ってくれて、史明君にこの本を読ませたかったと。僕のことを書くと言ったときに「マニアックなことをやるなあ」って史明君が言ったというのが載っているんですけれど、そういうこともあります。

僕の今の希望は、一人ひとりの人間関係の中で本当にお互いが交流できる、そして相手のことが自分のことのように、自分のことが相手のことのように思えるような関係が、多くの人達との間で広がっていくことです。これは戦争とは異質な世界だと思いますけれど、そういうものを自分が今いる場所の中から丁寧に創り上げながら、それが社会構造の変化ともつながるかというのが僕の中で大きな課題です。簡単ではないですが、それを丁寧に積み重ねていくことが一つひとつの時代を変化させていくことなんだと思っています。

沖縄の与勝半島の先に浜比嘉島があります。平安座島や宮城島との間に海峡がありますけれど、昔あそこは引き潮になると歩いて渡っていたんですね。自動車も通っていました。

僕がお世話になった昔のカミンチュ（神人）の方で比嘉ハツさんという方が僕をその海に連れて行ったときにね、この海がどのように満潮になっていくかわかるからよく見ておきなさいと言うんです。僕は向こうから波が来て満ち潮になるかなと思っていたら、まったく砂地です。ずっと一面の砂地。そうしたら、その砂地のあちこちからぴゅっぴゅっぴゅっと水が吹き出すんですよ。小さな泉のようなものがあちこちにちょっちょっと出てくる。あちこちにたったったっと出てくる。そうすると近いところと近いところがぴょっとつながるんです。そうして大きな水になるんですよ。そこからは早いんだよね、あっという間にぴょっぴょっぴょっぴょっぴょっとつながって、わっと一面が海になるんです。

時代が変わるっていうことはこういうことだったと、僕は比嘉ハツさんから教えていただいたんです。どんなに小さくても自分が今やってることが他のところとつながっていくということがいつか起こるとすれば、同じ時代に同じことを考えてる人があちこちいたとすれば、時代は一斉に変わるのかもしれないという感じがしています。これは沖縄で教えていただいたことで、自分の場所で、自分のいるところで精一杯、精一杯というかあまり力まないでいきますけど、ゆっくり楽しみながら一緒に仲良く生きていこうかなぁと思っています。

どうもありがとうございました。こんなにたくさんの方にじーっと聞いていただいて、皆さん疲れたんじゃないかと思いますけど、申し訳ありませんがありがとうございました。この後の交流会でゆっくり皆さんと交流をしたいし、ご挨拶したいと思っていますのでよろしくお願いします。―会場拍手

（2014年2月25日）

わがゼミナール

「不良少年」から子ども理解を学ぶ

人文学部　こども文化学科講師
宮島　基

教師を目指す人が多いこども文化学科の学生に、必要なものは何だろう？そう考えて、２年生の宮島ゼミでは、教育学に関する基本文献を徹底的に読み込むことにしました。テーマは„不良少年や不登校児など、学校に馴染めない子どもたちについて“です。

このテーマを設定したのは、学校に馴染めない子どもを更正させたい（更正させる教師になってほしい）からではありません。成績優秀で問題なく学校生活を送っている子どもだって、不良や不登校の子どもと同様、密かに悩みや葛藤を抱えているのではないか、そうであれば問題を抱えた子どもたちの様子を理解することは、様々な子どもたちの内面を知る助けになるのではないか、そう考えたためです。学生たちは共通テキストを一章ずつ要約してきます。それをゼミで発表し、解釈を巡って議論する。いわゆる文献輪読という、地味でオーソドックスな授業です。

先日は、いじめ被害者・加害者の女子中学生９人について書かれた部分を扱いました。テキストには、彼女たちのいじめの様子とともに、それぞれの被養育経験や学校での様子などが詳しく描かれています。担当の学生がそれを要約してきて、女子中学生たちのいじめの経緯をみんなで整理しました。ところがそれぞれの理解を出し合うと、その解釈は学生同士で全く異なるものでした。詳細は省きますが、見えてきたのは、いじめ被害者・加害者の子どもそれぞれの生い立ちを背景として、一人ひとりが友人関係に期待しているものや、親との間で蓄積させてきた課題などが複雑に絡まり合っている様子、そしてその絡まり合いの中で思春期の女の子たちが必死に自己形成しようとしている様子でした。ゼミの議論は、登場人物たちが互いをどのように捉えていたのか、その子の身になって比較する話へと広がり、とてもスリリングでした。

とはいえ、いつも議論が盛り上がるわけではありません。難しい言葉の確認やボンヤリとした感想を話している時間も確かに多いです。でも、学生の感想や違和感を解きほぐし、引っ掛かりをほじくり返す過程で教育的な課題が見えてくると、緊張感が生まれ議論になることがあります。私が質問を投げかけることもありますが、学生自身の経験から生まれた生々しい言葉に驚かされることもあります。そんな作業の繰り返しを通して、宮島ゼミのメンバーは、葛藤しながら成長しようとしている子どもたちの姿に少しずつ迫っていこうとしています。

研究のひろば

沖縄・大学・文学

法経学部 法経学科　講師
我部　聖

大学進学のために上京したときには、沖縄の文学や歴史を勉強するどころか、沖縄に帰ることすら考えていなかった。けれども、１９９５年の米兵による「少女暴行事件」で「沖縄問題」がクローズアップされたことで「沖縄」の話題から逃れられない状態となり、言葉にできないものが内側に溜まっていく日々を過ごしていた。そんなある日、ゼミ担当の井桁貞義先生に勧められて、目取真俊の小説「水滴」を読み、それまで内にうごめいていたものにかたちが与えられたような感覚を覚えた。それが「沖縄文学」を読むきっかけとなり、作品を通じて沖縄の歴史や社会を思考するようになったのである。

現在、琉球大学の学生が中心となって発刊した文芸雑誌『琉大文学』（全34巻、１９５３～７８年）を研究している。同人には、新川明、川満信一、岡本恵徳、清田政信、中里友豪などが名を連ね、戦後沖縄の文学や思想を語る上で重要な人物を輩出したが、作品も魅力的である。

池澤聡（岡本恵徳）の小説「空疎な回想」（第７号、１９５４年11月。後に「ガード」と改題）には、沖縄住民に銃を向けるガードが登場するが、「米兵」「米軍」「基地」という言葉は出てこない。それはなぜか？作品が書かれた頃は、新崎盛暉が指摘する「沖縄の暗黒時代」であり、米軍基地建設を目的に「土地収用令」を用いて強制的に土地が接収された時期であった。また当時は、出版物は検閲を受け、琉球大学でも「学生準則」で事前検閲が定められたうえに、学内にスパイが潜んでいたといわれている。こうした歴史的文脈とテクストの空白を重ねてみると、この小説が、検閲を通すために米軍基地を直接描かずに、ガードの葛藤を表現することを通じて、沖縄に生きる人どうしを争わせる米軍の存在を示唆することで、米軍占領を批判したことがわかってくる。

今年、不二出版より復刻された『琉大文学』の解説を書くために誌面をめくりながら、何度も「沖縄で文学する」という言葉を目にした。今年一月から『沖縄タイムス』で「おきなわ文芸時評」を担当しているが、中央の文芸誌に掲載された沖縄を描いた作品よりも沖縄で書かれた作品に重きを置くようになったのは、『琉大文学』の言葉がコダマしていたからかもしれない。

２０１２年に小説家の崎浜慎と『沖大文学』を創刊する際、沖大生はもちろん、沖大にかかわる人たちに表現を発表する場をつくりたいと考えていた。「沖縄大学で文学する」ことから沖縄とともに生きる言葉や思想が想像／創造されることを期待したいと思う。

「沖縄大学児童福祉特別奨学生制度」が紹介されました。

2014年11月25日（琉球新報社提供）

R 陽だまりを求めて　児童養護施設から社会へ　第3部　1

「必要なのは全額免除」

◆沖大奨学金

那覇市国場の沖縄大学で、松本弥生さん(19)＝福祉文化学科1年＝の笑顔がまぶしい。「どの講義を受けるかとか、生活のこととか、全部自分で考えなきゃいけないから、ちょっと大変。でも授業は楽しい!」。南城市の児童養護施設「島添の丘」を3月末に退所し、自宅から同大に通い始めて7カ月が過ぎた。入試広報室長の大城貴之さん(43)は、弥生さんの話をうれしそうに聞く。

同大は2013年3月、児童養護施設や里親家庭など社会的養護が必要な若者を対象に「児童福祉特別奨学生制度」を創設。弥生さんを含む5人がことし4月、進学の夢をかなえた。

「経済的に最も困っている人、教育格差を最も受けているのは誰か。彼ら以上に経済的に弱い立場の人はいないはず。進学したい人がいるなら沖大で何とかできないか」

提案者である大城さんは11年1月、琉球新報の記事に目を奪われた。児童養護施設にランドセルなどが届く「タイガーマスク現象」のさなか。進学や運転免許取得など、高校卒業後の支援が必要だと伝えていた。

「ショックを受けた」と大城さん。「進学する人がいないんじゃなくて、実は諦めていたんですよね」。脳裏に浮かんだのは中学時代の友人だ。近所にできた島添の丘にやってきた転入生は「自分たちと何も変わらず」すぐ仲間になったが、卒業後は県外で就職。空港で見送った記憶と、その"背景"が胸に迫った。

大城さんは12年10月、児童養護施設を対象にした奨学金を課内で提案したが、「ニーズがあるのか」と一時保留に。翌11月に里親会から奨学金制度を望む要請を受け、流れが変わった。学内には福祉の専門家も多く、奨学金を社会貢献と捉える土壌もあった。当初は半額補助で進めていたが、加藤彰彦前学長が「必要なのは全額免除だ」と判断し、理事会が決定した。

その翌月、高3になった弥生さんは施設職員と沖大の門をくぐった。「ここしかないと思った」。授業料が免除になれば、生活費を稼ぎながら自宅から通える。努力次第で精神保健福祉士と社会福祉士も取得できる。生まれて初めて担任に相談して、アドバイスをもらった。「頼っていいんだって初めて知った。先生たちには本当に感謝してる」

奨学金を受け続けるには成績の維持が必須だ。週4日5～6時間のアルバイトも欠かせない。楽ではないが"夢"は定まりつつある。心の病に苦しんだ母や、同じような人を助けたい―。「もっと深く学びたい」。確かな歩みを始めている。

（佐藤ひろこ）

◇　◇

第3部では、児童養護施設を巣立つ若者の進学や就職を支える人々や団体の取り組みを紹介します。

目標に向かって進む弥生さんの話をうれしそうに聞く大城貴之さん＝10月、那覇市国場の沖縄大学

メモ　沖縄大学児童福祉特別奨学生制度

児童養護施設や里親家庭で育つ若者に特化した奨学金として県内で初めて創設された。授業料を4年間全額免除する仕組みは全国的にも珍しい。同大はその他の減免制度や奨学金制度も多数ある。入試広報室☎098(832)3270

2014年度 父母懇談会開催

父母懇談会は、本学の教育活動をご父母の皆様に紹介しながら、学生の修学状況や学生生活をきめ細かく支援していくために、毎年9月の夏季休暇期間中に行っております。

今年度は、久米島・宮古・八重山・北部・中部・宜野湾・那覇の7会場で開催しました。各学科の教員が各地区在住の父母のもとへ出かけ、個別面談の形式で、現在の単位取得状況や出席状況の説明、またサークル活動から就職まで多岐に渡る相談を受けます。特に離島や北部在住の父母には、普段の様子をうかがい知ることのできる格好の機会となっています。

終始、和やかな雰囲気の中で進められ、面談後の懇親会でも交流を深めることができました。ご父母と面談を交わした教職員においても、これからの大学運営におけるヒントを頂くことができ満足した内容となりました。来年度も同時期に開催予定です。父母懇談会の取り組みへ引き続きのご協力、よろしくお願いいたします。

（学生支援課 上原 将司）

八重山地区父母懇談会（9月13日）

就職セミナー

就職支援課では、父母懇談会とタイアップした就職セミナーを実施しています。

就職支援課長の國吉より本学の就職状況と支援メニューについて詳しく説明させていただいた後、今年の卒業生と4年次学生によるパネルセッションを行いました。4年次学生には内定を得るまでの体験談を、入社して半年経った卒業生には社会人としての考え方やふるまい方を、それぞれの言葉で語ってもらいました。

初めての採用試験で内定をもらった学生や複数社の採用試験を受けても内定をもらえなかった学生。ご父母の皆様は、それぞれの就職活動の体験談から学生が何を感じ、どう考えているのか、その心の内を知る機会になったのではないかと思います。

4年次の学生からは、採用試験が続いてなかなか思うような結果が出ないときに両親がじっと見守ってくれたことにもとても感謝しているという言葉がありました。

卒業生からは、母親から最終面接の日に「あなたならできる。今回は内定もらえると思うよ」とメールがあって、こういうことを支えに頑張れたという話がありました。

父母からも「子どもへの接し方や親としてどうサポートしていけばよいのか参考になった」「子どもの気持ちが少しわかった」等の感想が寄せられました。

私自身も、卒業生が自分の言葉でそれぞれの仕事に対する考え方や就職観について堂々と話す姿を見ていると、たった半年でここまで成長するのかと大変嬉しく、頼もしくも思いました。

現3年生は今まさに就活のスタートを切ったばかりです。真新しいスーツにリクルート鞄を手にし、不安もやる気もごちゃ混ぜな学生たち。傍にいる私たちは心許ない彼らの動きにハラハラし通しです。ところが一つひとつ就活の経験を積むことで、あっという間に大人の顔に変身していくのです。学生にとって就活は大変なことがたくさんあると思います。大変なことを一つ乗り越えるごとに大きく変わっていくのだと思います。

今回で2回目のパネルセッション形式での就職セミナーでしたが、ご父母の皆様はもちろんのこと、パネリストの学生、卒業生の成長を実感できる貴重な機会でもあります。今後も沖縄大学とご父母の皆様、在学生、卒業生との繋がりを大切にし、より実りの多いセミナーにしていきたいと考えています。

（就職支援課　諸喜田 千恵子）

コーディネーター 諸喜田

百歳現役へ夢はぐくむ「沖縄ちゃーがんじゅう大学院」

NPO法人 沖縄地域福祉研究所理事長・福祉文化学科教授
上地 武昭

日本の平均寿命は女性で88歳、男性で80歳である。世界のトップを走る長寿大国であり百歳の医者、百歳の舞踊家、百歳の福祉施設経営者、百歳のスポーツアスリートなど、日本の高齢者達は元気である。

沖縄戦を経験した70代、80代は戦後荒廃の沖縄で一生懸命に子育てをして来た方々である。その子どもたちも成人し、青春時代にできなかった学びに再挑戦する高齢者が多数存在する。余暇活用としての老人クラブや健康づくりのふれあいサロン等が多く存在するが、学び直しの学習活動の取組は少ない。

NPO法人 沖縄地域福祉研究所では学習意欲の高い方々に沖縄の歴史や文化、社会福祉、社会活動、健康づくり等について学ぶ機会を設け、自らの健康づくりの実践や社会貢献活動に寄与してもらうことを目的に「沖縄ちゃーがんじゅう大学院」を2013年に開設した。

今年も那覇市や那覇市社会福祉協議会、那覇市自治会連合会等の後援のもと、沖縄大学の協力を得て、仲地博学長をはじめ諸先生方を講師として迎えるとともに伝統文化や終末について学ぶ講座もカリキュラムに取り入れ、第3期を開催している。

沖縄ちゃーがんじゅう大学院の他、私たちの取組は沖大生が活躍する場にもなっている。

以下、沖大OGで事務局スタッフをしている比嘉里沙さんに活動紹介をしていただこう。

2014年9月30日（沖縄大学）

NPO法人 沖縄地域福祉研究所では、沖縄大学の向いにあるやんばる食堂の隣りで、ちむぐくる学習サロン"お～きなわ"を運営しております。地域の方々の居場所づくりを目的とし、どなたでも参加出来る活動を行っております。

普段は3B体操教室、民踊教室、三線教室、手工芸教室、カラオケ教室など。木曜午前は、65歳以上の方々を対象に那覇市全域で実施されている「ふれあいデイサービス事業」を取り入れ、那覇市社会福祉協議会の専門スタッフによる健康指導やレクリエーションが行われ、参加者同士の交流の場として毎回35名程の参加者で賑わっています。

私共のデイサービスの大きな特徴でもある、福祉文化学科3年生による月に一度の「沖大ミニデイサービス」は、学生の手作り企画で、皆様が特に楽しみにして下さっている活動です。まさに祖父母と孫といえる世代間交流。参加者と学生が共に嬉しさや恥しさを心に秘め、様々な会話の飛び交うこの空間は、毎回、温かい気持ちに包まれます。

12月3日でちむぐくる学習サロン"お～きなわ"は開所2周年を迎えました。人との出会いやこの場所を大切に思って下さる沢山の地域の皆様のお蔭です。さらに充実させていくべき貴重な場所だと感じております。

（07年度福祉文化学科卒業 比嘉 里沙）

リレーエッセイ第2回
アラサー女子が伝える「経験」と「気づき」

幸か不幸か両親から勉強しなさいとあまり言われなかった私は、二十歳ころだったか、母にその理由を訊いたことがある。母の答えは「自分も父親から勉強しなさいと言われたことがなかったから」だった。でも私のランドセルから一桁の点数が記されたテスト用紙が出てきた時はさすがに仕事をやめようか迷い、祖父に相談したことがあったという。

祖父曰く、私は自分で経験して初めて気づくタイプだから、そっと見守ってあげること。いつかは自分で気づくはずだから、との助言をもらったとのことだった。今は亡き祖父の助言は、今もそしてこれからも私にとって人生の指針となる大切な言葉である。

昨年末、私はモンゴル出身の友人と5年ぶりに再会した。友人といっても、一人旅の道中で出会い、ほんの少し会話を交わしただけの仲である。何通かメールのやりとりをした中で、彼が研修医として一時的に韓国で勉強していることは知っていた。

再会してすぐに、彼に対するボンボンのイメージ（ごめんなさい）が一瞬で崩れた。彼はシングルマザーの家庭で育ち、必死に勉学に励んだこと、毎日3時間の睡眠で学業とアルバイトを両立してきたことなど、自分の生い立ちを赤裸々に語ってくれた。それは自慢や美談といったものではなく、ほぼ初対面の私に自分を知ってもらうために、彼なりの気遣いであるように感じた。でもね…、彼が続けて言った。

そんな幼少時代を後悔している。僕にはずっと友達と呼べる人がいなかったし、友人と遊んだ想い出なんかは一切ない。幸いそれに気づいて今は親友もできたけどねと。勉強漬けの経験が、彼に友達の大切さを気づかせたのだと察した。そして今度は私自身のことを彼に伝えた。大勢の人の前で話をしたり、表現したりすることが苦手な私だが（苦手をごまかすのは得意）、頑張って話をしてみると、自分とは別世界と思っていた彼が、意外にも私に共感を示してくれたことがうれしかった。相手の顔を伺い、奇をてらうようなことはせず、素直に自分の考えを表現する習慣が私には必要であると感じた。そして祖父の言葉を思い出し「経験」と「気づき」の大切さを改めて教えられた再会でもあった。

「迷うならまずやってみたら？ 一度経験することで気づくことが必ずあるはずだから」学生に対して私が偉そうに言い放っているが、これは適当ではなく本心である。

そして国内外問わず、いろんな場所に出かけることを奨める。上手くいかない時、自分だけが不運な人生を送っているように思いがちだが、一歩外に出て、周りを見渡すと、苦況の中で必死に生きている人たちがいることに気づくからだ。

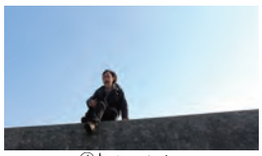
"Nothing ventured, nothing gained."

（国際交流室　前大 梨瀬）

次回は入試広報室のエース、比嘉さん。

ある日の法経学科1年 合同ゼミ風景

⑤大浦湾


④わぁ～ぉ！

③先生、頑張って！

②見たい（N先生）

①いい眺めですよ～（S先生）

⑤海保がやってきた

④俺の話をきけぇ～（Mカメラマン）

③海から行くんだ

②フェンスの向こうには（H議員）

①辺野古漁港だってー

第３回元山和仁記念 社長弟子入りツアー 成果を学長に報告

東京中小企業家同友会主催「元山和仁記念『社長弟子入りツアー』」は、東京の中小企業への就職を希望する沖縄県内の学生を公募し、東京中小企業家同友会の会員企業を１週間で２社訪問してもらうインターンシップ。「社長弟子入り」を通して社長の企業経営ポリシーや社員の仕事ぶりを見聞し、社員へのインタビュー、模擬試験などを体験し、今後の就職活動の糧とすることを目的としたものである。

本学からは、福祉文化学科３年次の大嶺孝太君と法経学科３年次の前泊紗江さんが参加した。事前に、言葉づかい、立ち居振る舞いのマナー、報告書の書き方などの研修を行い、準備万端でツアーへ送った。９月15日～20日の日程で、２社の企業の社長に付き、経営現場に直接触れる貴重な体験となったようだ。

実習は、ハードな日程であったらしいが、帰沖後の彼等には大きな成長が感じられ、自信に満ち溢れた表情が印象的であった。（就職支援課 國吉 正人）

大嶺君、仲地学長、前泊さん

教職採用試験（小学校）合格体験記

こども文化学科４年次　上窪　亮一

平成27年度沖縄県公立学校教員候補者選考試験。今年は去年を上回る８名の現役合格者が出ました。まずは、先生方、職員の方々による対策講座や強力なバックアップのおかげで合格できたことに深く感謝し、お礼を申し上げたいと思います。

教師になりたいという気持ちを抱いて大学に入りました。しかし当初入学したのは、関西の大学でした。沖縄大学には、編入学という形で２年次から在学しています。沖縄大学では、たくさんの魅力的な講義が行われ、力になりました。

採用試験に向けて本格的に勉強に取り組んだのは今年の３月に入ってから。１次試験対策では、毎週金曜日に行われる対策講座に参加し、配布されたプリントを完璧に解けるように繰り返し勉強しました。テキストなどは学習指導要領の穴埋めテキスト１冊だけを何度も使いました。対策勉強をしていると、講義で習った事が結びついてくるので、普段の講義の大切さをしみじみ感じました。

２次試験の対策は、毎日朝９時から夜10時頃まで大学で勉強をしました。２週間で対策をするという集中力を要し、体力的にはきつかったのですが、後々教員となる私にとって、とても有意義な学びとなりました。

２次試験対策でも日頃の講義で身につけておくべきことが多くあると感じました。例えば、講義中の模擬授業では積極的に授業者をやることで、自らの授業力を向上させることもできます。

こうした講義の中で一歩ずつ力をつける事をしていた分、それが自信にもなり、２次試験対策にも気持ちに余裕を持って臨むことができました。

また、１次を通過した８名は、ライバルでもあり仲間でもありました。毎日試行錯誤しながら同じ部屋で、共に小論文を書いたり、面接練習を行ったり、模擬授業を見せ合っているうちに「みんなで必ず受かってやる」という気持ちを共有していったと思います。お互い採用試験に合格し来年から教師という立場になりますが、これからもいい刺激をもらいながら、切磋琢磨していきたいと思います。

合格発表があり、その時には安心感や喜びよりも「お世話になった方に報告をしないといけない」と感じ、時間を作って訪問しました。報告をしていると「こんなにも多くの方々にお世話になったんだ」と、感謝の気持ちが溢れてきました。多くの巡り合わせがあって今の私があります。今度は恩返しです。必ず素敵な教員になります。

編集後記

キャンパス緑化。表の写真は、最近植えられたアカギの幼木。世界３大花木のカエンボク、ジャカランダ、ホウオウボクの幼木も正門近くに植わった。正門？ 先日の外部評価委員会では、「入口に門のない開放的な佇まいに、地域に開かれた奥深さを感じる」と評された。「緑なす開放的な沖大」へ。（後藤）

沖縄大学同窓会　創立50周年記念式典・祝賀会（11月28日）

UNIVERSITY ACCREDITED 2014.4~2021.3

沖縄大学は、国が義務づけた第三者評価として、公益財団法人大学基準協会の相互評価の審査を受け、同協会の定める「大学基準」に適合しているとの認定を受けました。

認定期間は、7年間（2014年4月1日～2021年3月31日）です。